

流れるイメージと、流れをつくるテーマ

津守 眞

子どもの遊びの中にあるテーマに気が付く

朝、四歳のその子は私の家に飛び込んで来るなり、幼稚園で飼っているカエルのことを話し、庭に池をつくり、カエルのお城をつくると言った。私はこの子と池を掘るのにはどうしたらいいかと考えているうちに、今度は温泉をつくると言い、風呂場のお湯をホースで玄関の方に出すと言う。以前にそうすることがあった。私は玄

関が水浸しになる覚悟をするうちに、その子は勝手口に束ねてあった余分のホースが風呂場の水道の蛇口につながらないかと考え、ホースとホースをつなぎ合わせようとした。どれもうまくつながらない。私はその子と一緒に苦心するうちにホースに鋏で切れ目を入れたらホース同士がつながった。更にそれを玄関の排水口の穴に突っ込み風呂場の水が玄関の外にまで出た。箕子すゐこを敷くと、玄関前がビーチのようになる。その子がそこに小さ

な魚模型や貝殻も置いたら、海岸のようになった。

幼児の遊びは外見は多様であるが、よく見るとそれぞれの子どもに繰り返し現れるテーマがあることに気が付く。この場合も次第にわかったのは、ホースをつなぎ合わせることで水を流すことがこの遊びのテーマになっていることだった。私はそれに応えていけばいい。気が付いたら十二時になっていた。二時間半かけたことになり。カエルのお城や温泉は忘れたかのように熱心に遊びつづけた。

「流れをつくる」ことと、「つなげる」こととは、この子のごく小さい時から繰り返した遊びのテーマであるが、その最初はいつごろからだったろうか。

そのはじめり

ジッと見ていて関心のあるものに手を出すようになった後のことである。一歳一か月の時、トイレの水の流れる音がしたら、この音は何だというように、その子は居間からトイレにサッと歩いて行った。三週間後、その子

は私の腕をかかえて台所に行つて、「ダ(抱っこ)」と言つて流しの上に行つた。音のするところに連れていけと、要求が高度になった。水の流れに手を入れられるように抱くと、背が高くなり、今まで見えなかったものが見える。しばらく水の流れで遊ぶと快く次に移る。

つなげることの最初は、一歳四か月の時である。ババちゃん(祖母)に新聞折込チラシの自動車を切り抜かせ、「ダ」と言つてゼロハンテープを出してほしがった。自動車をゼロハンテープでつなげさせた。ババちゃんと体を寄せあつて、切り抜いてもらう親しみを味わつていくようだった。

◇一歳七か月

昼食後、台所の流しで水を出し、雑巾や手ぬぐいを振り回して、床を水でびしゃびしゃにし、喜んでウワーと声を上げた。大胆に水をまいた。私が濡れていいように準備をして、思いきつて相手をした。三十分くらいも水で遊ぶと自分でやめて椅子をおりた。着替えさせてもら

い、それですっかり終わった。そのあと、ひとりで部屋を何度も行ったり来たりして、籐椅子の下に猫の縫いぐるみや電車を突っ込んだり、あちら側からのぞいたり、こちらから見たりしていた。ひとりで遊んでいるというのは、ひとつのものを多方面から見るといふ高度なことなのだ。

◇一歳九か月

台所の流しで水遊びを始めた。私が脇についていた。風呂場に行こうかと言ったら、最初、風呂に入れないと母親のかと思つてためらつた。風呂に入るのではないと母親が説明したら、すぐに自分から風呂場に行つた。私が空の風呂桶に入り、その子が水栓の操作をし、強くしたり弱くしたり、ジーツと見ながら注意深く操作する。機械部の蓋を開け、蛇口を機械部に向けたので、そこは機械だから水を入れるんじゃないよと言つたら、じきに蓋を閉めて自分から外に出て、「オワリ」と言う。止められたと思つたらしい。子どもは大人に対して敏感である。

◇二歳

二歳になつたその子は、玄関前で、大人にじょうろで水を流させて、水の流れを見る。途中でしばしば黙つてジツとしている。一人で考えたり、想つたりしているのだろうか。そういうとき私はあまり近寄らない。子どもが自分で始めたことは、きつと次の思いがけない良い展開がある。

ババちゃんと紙粘土で亀を作つたらしつぽがとれた。それをつけさせて、自動車の上に乗せてみたり、椅子の上から見たりしている。しつぽがどこにつながるかを考へていたのかもしれない。傍らにいた私は、人間にも昔はしつぽがあつたことを考へた。記憶にもないほど遠い過去から引きずっている。生まれてから二年しか経たない幼児にはその頃の記憶があるのかもしれない。

昔だつたら田んぼの畦道や小川の流れが自然とともに身近にあつた。いまは水道の蛇口は大人の背の高さだから、大人が抱きかかえないと届かない。一歳を過ぎた頃から子どもの水への興味に親は困らされるが、水への関

心はとどめることはできない。私の学校ではいつの時期にもだれかがホースから水を出して遊んでいた。いままもそうである。だれかが水の流れに夢中になっている。それを可能にする環境をつくることは教育の課題である。

流れるイメージと、流すテーマと

流れるという自動詞と、流すという他動詞とは密接に関連している。流れる水の触運動覚はイメージを生み、次には自分の手で流れるイメージを実現しようとする。それは人生の早い時期に始まる活動のテーマである。流れるという語は水だけではなく、電線を電気が流れるなごど比喩的に用いられる。子どもは電車で遊んでいても、何台もつなげて、流れるように長くしたい。つなぎ目がうまくいかないといと、つながるように工夫する。自分で作った牛乳パックの電車をガムテープで貼り合わせようと試みる。糸をつないでケーブルカーの通りをよくする。筒の中に水を入れて水が通るようにする。遊びの材料が何であろうと、流れるイメージは共通であって、流

れが阻害されるのは気持ちが悪くない。

水はどこから来てどこへ行くのか。リチャード・スカリーの絵本、『What People do All Day』、「おとなの一日」は、その子が好んだ絵本のひとつだった。大工さんが水道管を二階の浴室にまで通し、電線が電柱から洗濯機やオープンにまで張り巡らされる。その水道の水はダムから各家庭にまで送られる。汚水は別の管を通して排水溝に集められる。幼児の関心にびつたりだった。私がスカリーの本を持つてくると、その子は私に寄りかかって聞いた。

私の家の本棚の古い保育絵本の『キンダーブック』には水の流れのテーマが何冊もある。葦の沼は、幾年も経つうちに水が涸れて小さくなり、木が切り倒されて団地の公園の小さな池に残るだけの話（村上勉え、三越左千夫ぶん）は、何回



も読まされた。

水遊びはじつじく

二歳を過ぎたその子は、水遊びをやると言って、裸足で石の上を歩いてホースを長くして玄関前に水をまいた。水が流れることが大事だった。水たまりに、木の葉を浮かべて遊んだ。土の穴に水がたまるのをジツと見る。その子は自分の手にホースを持つ。私は濡れないかと気になったが、自分が濡れないようにホースを手を持っていった。じきに濡れても平気になるが、穴に水がたまり、穴から外に水が流れると、乾いた土に水が染み込むのをじつと見る。この水はどこからくるかと尋ねるの
で、私は水道の栓にホースをつないで、水はホースの中を流れて、穴の中に出てくることをゆつくり説明すると、ジツと聞いている。「流れる」ところに関心がある。ババちゃんが来て、寒いから家の中に入ろうと言うと、「イカナイ」と言った。子どもが先に立って歩き回るの
で、私も寒さを感じなかった。私は、「今日のおやつは

何かな」と言うと、ジツと聞いていて、じきに部屋に入った。リンゴの煮たものだった。一時間半も水で遊んだのにそんなに長い時間が経ったとは思えなかった。それほどその子は充実していたし、私も面白く過ごした。

どこからどこへ

しばらくしたら、「イスカラ イスへ」と言うので、椅子と椅子の間に板を渡し、細長い箱を二つつないで鉄橋にした。新幹線がその上を通るようにするのに苦労した。それを見ていたが、突然「ボク、ウマイカラ」と言って、積み木をつなげて新幹線が通る線路をつくった。朝からこうしてつきあっていると、自信をもち興味をもつて遊ぶ子どもは、自分から次に見つけ
る。

夕方、私のワンピースを見て、コードをコンセントにつなげたがった。私は積み木を長く並べて、別の部屋に行くように誘導した。さっきのレールにした椅子と板にま
でつなげたら、金色の玉を持ってきてぶら下げると言う

ので、ガムテープと、紐とセロハンテープを使って椅子にぶら下げた。そうしたら、急にままごとセットを持ってきて遊び始めた。新幹線を手で動かし、障子の敷居のレールの上を、だまって、あちらからこちらへと、邪魔なものをのけて、ガラス戸を動かしながら、新幹線を走らせた。コンクリートミキサ車がこわれていた。そこを指して、「ココカラ ジャーッテ コンクリートガデル」と言う。そうしたら断然精彩を放ち、自分だけで熱心に遊び始めた。自分で始めたことはかくも違うものかと思わされた。

子どもは人類の父

私が以前にお茶の水女子大学で、自然科学の専門の方々と共に行った共同研究がある（文部省科学研究費特定研究 一九九七）。その中で共同研究者のひとりである私の畏友、山柘雅信氏の「幼児の自然観における流体力学」は、次のように述べておられる。「今日自然科学は途方もなく進歩したが、自然は荒らされ、人の心は空

虚となってしまった。そして、科学技術を志す若人には、自分の学問と仕事のよりどころを求める願いの切なるを見るのである。このときもう一度幼児の心を知りたい。創造物に対する喜びの心、自然に対する畏敬の念は子どもの中に見られるに相違ない。それによって私たちは教育のよりどころにしたいのである。」（山柘雅信『信仰・教育・研究』武田書店 二〇〇四）。私共はお茶の水女子大学附属幼稚園と私立「まんとみ幼稚園」で、砂場で大規模に水を流し、山をつくり、雄大な遊びが展開されるのを見、その中に科学技術の端緒が観察されるのを見た。その論文の最初にワーズワースの詩の一節、『子どもは大人の父である』が引用されている。「子どもは大人の父」とはおかしくはないか。英文で、最初の「子ども」と「大人」の語には定冠詞が付され、父には冠詞がついていない。この子ども、あの大人、どの人にとっても、子どもは人類の父とでもいえる存在という風には考えたのではないだろうか。

（保育研究者）